

Title	大脇義一：「直観像の心理」：(昭和二十四年、培風館。二四九頁)
Author	柿崎, 祐一
Citation	人文研究. 1 卷 4 号, p.96-96.
Issue Date	1950
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大學法文學部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

大脇義一「直観像の心理」

(昭和二十四年、培風館。二四九頁)

直観像とは、病態的でなく精神的に全く健全な人において、或事物を見てすぐ後に又は数分乃至数年後にさへも、自然に又は有意的に前の事物について現われて来る心像である。それは通常の記憶表象の如く單に思い浮べられる印象ではなく、一定の位置に實際見るようにはつきりと現われるのであつて、文字通り「再び見える」のである。而も幻覚と異り、本人はその事物が外界に実在しているのではなく自分が思い浮べているものであることを自覚している。それは又普通の残像とも異なる。いわば知覚と記憶表象との中間に位置するような特殊な心像である。このような心像を持つ能力が稀には存在することは、既にアリストテレス以來氣づかれていたのであるが、近代に至り特にイェンシュエ一派が、之は知覚と記憶表象との分化以前の根源的事態であり、外なる知覚と内なる記憶との融合を示すものと考えて、多くの研究を行つて以來、一部の関心をひいて來た事実である。

本書はこの直観像の問題に關しての業者の多年の研究を總括し問題の概観を与えようとしたものであつて、既に一度刊行されたものに今回新しく増補されたものである。先ず直観像素質は成人よりは児童に多く見出されるものであり、そこに又イェンシュエ等が之を知覚と表象との発生の元型と考えた一つの理由があるのであるが、本書においても第一に児童を対象として行つた実験的研究がまとめられ、更にそこから必然的に直観像素質の教育的意義に論及される。それは決してこの素質を特に養成するというようなことではなく、この質素が多いことに示されている児童心性の

未分化性、或は精神の若さに即したベスタロツチ的な教育の意義である。次に、直観像には比較的知覚残像に近いT型(テター型)と表象像に近いB型(バセドウ型)とが區別されるが、之に基いて歴史上著名な人物、例えばゲーテ(B型)やJ・ミューラー(T型)や、其の他芥川龍之介等における直観像素質の存在が、作品や行蹟を例証としつつ説明されている。

以上が本書の第一、二、三篇を構成する。一般の読者にとつては、著者の言葉によれば「アメリカ新大陸の発見にも比すべき精神界での大発見」であるところの直観像の現象について、豊富な資料を比較的平易に且面白く理解させてくれる点で、通読されても決して徒勞ではないであらう。

最後に第四篇として、直観像に關する從來の理論的研究が紹介される。一体、今日の心理学の傾向よりすれば、直観像に限らず一般に意識体験の分析というようなことは、少くとも主要な課題であり得ないのであつて、直観像の問題の如きも一応置き忘れられた形であることは否めない。従つて本書において説論の範圍が直観像が知覚と表象とに對する關係についての議論とか、直観像の近接現象としての共感覚、幻覚、残像などについての内観的研究とかに限定され、現代の心理学の体系において占めるべきこの問題の位置、將來への問題発展の見通しなどが、必ずしも明らかにされてはいないことは、むしろやむを得なかつたことであらう。そこに、後学者のための資料としての本書の文献的価値があると同時に、専門書としてはいささかあきたりない所以もあるといわねばならぬ。

尚、直観像の問題に關連してイェンシュエの性格類型論を無視することは出来ない、しかしイェンシュエもここに至つては結局思弁的な独断論に墮してしまつていたのであつて、科学的価値には乏しい。本書においても、序説に断つてある通り、一応関心外とされ簡単に概観されているにすぎない。このことは本書の權威のためにむしろ幸いであつたといえる(柿崎祐一)